

第3回 三田市環境審議会「(仮称) 生物多様性さんだ里山戦略」
策定検討部会 議事要旨

会議の名称	第3回 三田市環境審議会「(仮称) 生物多様性さんだ里山戦略」策定検討部会		
会議の日時	令和5年4月14日(金) 17:00~18:30		
会議の場所	三田市役所 2号庁舎 2201室		
出席した委員の氏名	石田弘明委員(環境審議会委員、策定検討部会長) 三橋弘宗委員(専門委員) 谷本卓弥委員(専門委員) 吉田滋弘委員(専門委員) 奥田 昇委員(専門委員) 八木 剛委員(専門委員) 山田敏雄委員(環境審議会市民委員)		
出席した庶務職員の職及び氏名	事務局	まちの再生部	本参事
		ゼロカーボンシティ推進室	辻下室長
		里山のまちづくり課	三谷課長、上田係長、岡野
		(公財)ひょうご環境創造協会(委託業者)	藤井、日野、諸井
傍聴人の人数	0名		
取材者の人数	0名		
内容	1 開会・あいさつ 三田市まちの再生部 本参事 2 市からの説明 3 その他 4 閉会		
会議の概要	「(仮称) 生物多様性さんだ里山戦略」策定について、資料に基づき説明を行い、それに対する質疑及び意見を伺った。		
公開・非公開の区分	公開		
使用した資料の名称	<ul style="list-style-type: none"> ・関係者名簿 ・座席表 ・資料1 第2回策定検討部会の振り返り ご意見と三田市の対応について ・資料2 アンケート調査結果報告書 ・資料3 自然共生エリアにおける既設の保護区の修正 ・資料4 戦略素案 ・資料5 皿池湿原保全活動計画 ・資料6 まちなか里山公園整備方針 		

○協議内容

事務局	[資料1]「第2回策定検討部会の振り返り ご意見と三田市の対応について」の各項目について、三田市の対応（素案の掲載）の説明
部会長	ご意見ご質問、または前回の意見が対応されていない、意図と違うなどあれば発言をお願いしたい。
全委員	質疑・意見等なし。
事務局	[資料2]「アンケート調査結果報告書」に基づき説明
委員	ざっと見た感じでは、三田市民は自然や生き物に興味があるように見てとれるが、年齢構成をみると若い方が少なく、60代、70代の引退世代が多い。私も琵琶湖でこのようなアンケート調査をしているが、ポジティブな意見はそのような年代の方が多い。今回のアンケートも若い年代のサンプル数が少ないので何とも言えないが、若い方が自然や生き物にどれだけ関心があるか、ということが今後の三田市の未来を考えるとときに重要と思う。そこは年齢別にみてどうなのか。
事務局	全体的に若い方の回答数が少ないので、平均的な意見の回収と言えるかどうか、というのはあるが、高齢の方に比べると関心度は低いようです。
委員	そうであれば、しっかり分析し検討してみてもどうか。
事務局	アンケート結果だけを見ると三田市民は自然や生物への関心が高いことになりませんが、今回のアンケート調査の回収率39%は市が実施している他のアンケート調査と比較しても低い結果となっています。例えば三田市では市民意識調査を毎年実施しており、令和4年度の回収率は46.9%とあまり高くありませんが、今回のアンケート調査の回収率は更に8%も低い結果になっています。 回収率が低いということと回答者の8割以上の方が自然や生物に関心があると回答していることから、今回のアンケート調査では自然や生物に関心のある人だけが回答したことを示していると考えられます。アンケート回収率の低さの背景には自然や生物に無関心な人が相当数おられることが読み取れます。
部会長	私もそう思う。若い方からの回答が少ないのは、そもそも関心がないということを反映しているのだろう。 ほか、意見や質問があればお願いします。
委員	どのような形でアンケート調査したか分からないが、調査結果は市民のみなさんにフィードバックされます、あるいは回答結果を踏まえて還元します、というようなことは説明されているのか。それがないと、回答するインセンティブにならないし、回答率は下がる。
事務局	アンケート調査結果で明らかになった課題を戦略に反映させます。 また、戦略の進捗状況を評価する際に、再度アンケート調査を実施して、比較検証するつもりです。
委員	あらかじめアンケート調査時に、結果をここで報告しますと載せておくと、回答者が自由に見ることができる。そういう工夫もしたほうが良い。毎年何らかの調査をしていても、回答者にはどんなふうに活かされたかがわからないだろう。
事務局	今後参考にさせていただきます。
部会長	アンケート調査時に、今このような戦略をいついつまでに策定しようとしている。それにみなさんのご意見を反映させたいので、アンケート調査をします、というような趣旨説明はしているのか。
事務局	アンケート調査の前文で趣旨は説明しています。

部会長	それであれば、策定後に関心のある方は、自分たちの意見がどこに反映されているか、見ていただける可能性がある。
委員	無関心な方が多いというのは、そのとおりである。関心のある方でも、動いてくれる方は更に少ない。無関心の方をどうすればいいかという、無関心でもいいから、良いほうへ誘うしかないと思っている。前回から検討してもらっている会社や家庭でどのようなことをすればいいのか、ということを示して協力していただくのがいいだろう。
事務局	どうすれば無関心な方を誘うことができるのかについて、後日事務局から提案させていただきますので、またご意見をお願いします。
部会長	資料2の3頁の居住地区について、ニュータウンとそれ以外の地域の方の意識は違うのかどうか、それが三田市の特徴の一つではないか。そのような地区別の分析はする予定はないのか。 特にニュータウンの方と他の地区の違いなど、何か特徴はあるのか。
事務局	問10のシカやイノシシ等の問題となっている動物に対して、どのような対策を講じるべきかについての回答では、ニュータウンの方は「特に対策は必要ない」「わからない」という回答が多く、北東部の方は「調査し対策を講じるべき」と回答する方が半数以上の55%で、地区により顕著な差がみられました。
委員	数の多さではなく、総括として、地区ごとの特徴をクロス集計し、フィードバックするのが良いやり方だろう。少ない意見も拾うことができる。冊子作りからバックキャストして何をまとめるか考えると良い。 統計的に厳しくしないで、ニュータウンの地区、旧市街地地区、その他の3つに分ければ良い。 おそらく総合計画を策定したときの地域区分があるはずなので、それと整合させてアンケート調査結果もまとめるのが良いだろう。
事務局	地域の特徴が出せるような形で整理します。
事務局	[資料3]「自然共生エリアにおける既設の保護区の修正」に基づき説明
委員	自然共生エリアは、結果的に30%は達成できるのか。
事務局	世界目標として30%を掲げているので、三田市だけ25%を掲げるとするのは考えにくいです。
委員	国全体で達成できれば良いので、少なくとも法的には問題ない。
事務局	資料3にある候補地を必ず自然共生エリアにしていこう、というものではありません。今あり得る候補地を集めるとこうなりますというものです。例えば市街地に残っているため池で保全が始められると、そのような場所も共生エリアの候補地になることも考えられます。
委員	目標は決めてやっていかないと、計画は進まない。この資料は概算で見積もったもので、これくらいのスケール感であろうというものだ。事務局が言われたように、現時点で可能性の高いところはこれくらいある、ということで目標を設定し、その後運用しながら、そこをバックアップしていくというのが計画である。 一定のルールを基に進めて、途中で良いアイデアがあれば実施する。国際的な情勢が変われば一気に進む可能性もあるし、大きな災害が起きれば、また状況も変わるので、先は分からない。できることを愚直にやっていくというスタンスで良い。国が30%を掲げているからといって30%達成しないと非難されることはない。

部会長	重要なことは、今回の戦略では、自然共生エリア 30%を目指すことを前提でやっていく、ということである。
委員	カーボンニュートラルの宣言と同様に、まずは目指すことが大事で、努力目標はしっかりと設定しておくのが良い。 自然共生エリアに関しては、今のこの枠組みに依存するのではなく、何かルールを設定して積極的に自然共生エリアに入るような仕組みを今後検討していく、ということは戦略の中にあっていいだろう。例えば、ソーラーパネルを設置する場合には森林を伐採するが、エリアの 60%は残さなければならないので、その 60%は OECM にすることを推奨することを条例に書いておく。第 3、4 の工業団地を造る場合に森林を伐採するが、伐採しない森林部分は OECM にする等のルール設定等が考えられる。
部会長	良い意見だと思うが、戦略には、まだそのようなことは盛り込まれていないのでは。
委員	盛り込むのであれば、「OECM の設定を促進するための、新たなルール作りを検討する」というような表現で記載しておくことはできる。
部会長	そのような形で盛り込むことができるだろう。
事務局	今いただいたご意見は、一旦持ち帰らせていただきます。
委員	各法律も変わっているし、河川の流域治水一括法案の中に補助の出るものなどがあり、それらとセットで考えると良い。まだ全部は出揃っていない状況ではあるが、制度の促進は検討するというのも、書いておいたほうが良いだろう。いずれ OECM はインセンティブとして返ってくるのが予想されるが、中身はまだ見えないから皆さん二の足を踏んでいる。TNFD が導入された時点で、確実に関わらざるを得ないので、そこは市として検討の余地を残しておくのが良いだろう。 OECM に関しては県もこれから検討するところである。候補地を市が OECM として申請してくださいと言っても、してもらえないだろう。例えば OECM を申請する者には、伴走支援や助成制度を設けて、書類作成の支援や登録されれば活動費がいくらか補助される等があっても良い。他府県でもそのようなことの検討が進められているので、一つの可能性としてイメージを持っておいてもらいたい。
委員	環境保全型農業 4%をプラスしますということだが、三田市の農地のうちどのくらいがこの環境保全型農業なのか知りたい。これをもっと増やせるのなら、もちろん増やすのが良いだろう。例えば水田は保全型農業でなくてもある程度生物多様性には役立っている。それが加算されないのに、ゴルフ場がそのまま全部加算されているのはどうなのか。
委員	ゴルフ場を加算する意図は、ゴルフ場の周りには必ず森林をつくらなければならないので、その森林部分を OECM にしてくださいというようなイメージで書いているのだろう。ゴルフ場のグリーンを OECM にするという訳ではない。
部会長	ゴルフ場の生物多様性に配慮した草原部分を OECM に入れるということではないか。
委員	ゴルフ場のグリーン周辺の刈り込んである部分は、生物多様性が高いと言われている。
事務局	ゴルフ場は、森林と草原部分を想定しています。 環境保全型農業は、面積を把握しているので、積算しています。
部会長	田んぼの畦の草原は、生物多様性が高く、多様性に貢献している。一つ一つの畦の面積は小さいが、合計するとけっこうな面積になる。

委員	ラムサール条約でも田んぼは OK なので、環境保全型農業でなくても市でルールを決めると良いだろう。例えば、田んぼダムで水を溜めている、減農薬であるとセットにする等。問題は、管理主体である土地改良区がまとまるかどうか。ゴルフ場よりそこはおそらくハードルが高い。
事務局	市議会の令和5年度予算委員会において、議員から「減農薬・有機農業は農業者への負担が大きすぎる。採算が取れない。市が有機農業を推進するのであれば何らかの補償なり補助が必要。」とのご意見をいただいています。
委員	<p>全部の農地では無理でも、それをメリットに感じる人たちもいる。国のみどりの食料システム戦略の方針に基づいてその余地を残すのが良いが、農業者全員に負担をかけるのはあり得ない。</p> <p>出荷するときに、自然共生エリアで作ったお米であると言えるメリットはある。三田市が売り方のチャンスを提供し、それがたくさんあればあるほど農業者にとってメリットになる場合もある。</p>
部会長	資料4の素案は事前にデータで送付してある。ページが多いのでこの部会では説明は割愛し、目を通してあるという前提で議論を進めていく。どこからでも構わないので、新たな提案、内容、見せ方、ご意見・ご質問等をお願いします。
委員	<p>今までに出来ていた文章を合体しているので、言葉の統一がされていないものがある。生き物と生物が混在しているが、統一したほうが良い。生物のほうが統一しやすいかもしれない。</p> <p>P77に「こうみん未来塾」が出てくるが、「こうみん」は三田市内では通じてても、ほかでは分からないのではないかと思う。同じ頁か歴史の書かれた頁に、幕末に川本幸民さんという人がいたことの説明を入れておくのが良い。</p> <p>アンケート調査結果の市民の方のご意見をみると、私は良い言葉だと思うが、「半自然」という言葉が分からない、「半」とはどういうことなのか、という方が多くみられたので、「半」は二次的な自然であるということの丁寧な説明があるのが良いだろう。</p> <p>他に、太陽光パネルが街中にたくさんあり、それなのに生物多様性を高くというのはどうなのか、というご意見が2・3あったので、こういう方針でやっていますという説明が要るだろう。</p> <p>自由意見の中に山菜採りをやりたいと書いている人がいたが、山菜採りには人の敷地に入って取っている例があるので、人の敷地であることが書いてあってもいいかもしれない。他は予想できた範囲内の意見であった。</p>
事務局	素案には、読みにくい箇所や意味の分かりにくいものもあります。これまでの委員のご意見を取りまとめた段階であり、次回の部会までに事務局で精査して編集作業した結果をお示ししますので、またご意見をいただき、最終案を作成します。
委員	今回の素案には P69 コラム5「里山林は放置しても自然に還らない？」が新たに掲載されている。これまでに書かれてあった説明では、いったん人の手が入った里山林は放置しても自然の奥山のような状態にはもどらないので、奥山にあるような木の苗を積極的に植えて、人の手で元に戻すのだ、というような話で、人が変えてしまった生態系は、そのようにすれば良いのだな、と非常に理解し易かった。しかし、今回のコラム5には、樹齢が揃ってしまうので元に戻らないとあり、要素的には両方あるのだろうが、以前の説明のほうが分かり易かった。
部会長	委員のご指摘のとおりで、里山林を放置しても、多くの植物種は絶滅しているので、元の自然や原生林には戻らない。そこを何とか改善するため、積極的に多くの種を導入しようという話になっている。

事務局	前の文章を確認し、分かり易くします。
委員	先ほど意見が出ていたが、7頁のコラム1にある「半自然」という言葉は馴染まない気がしている。「半自然草原」や「半自然植生」という言い方はよく耳にするが、「半自然」で止まるのは聞いたことがない。部会長に伺いたいのは、このような言葉はあるのか。
部会長	「半自然」で止める言葉はない。やはり「半自然林」や「半自然草原」のように、後に何かが付く。そういう意味では違和感があるが、あえてこのような馴染みのない言い方を使うことで興味を惹きつけるという意図だと思われるが。
委員	キャッチコピーではないか。
事務局	そうです。出典は鷲谷いづみ氏の「里山」という本です。
委員	私のイメージでは、「半自然」というと、ビルと周りの公園という感じで、里山のイメージはあまり湧いてこない。これは個人的な感覚である。
事務局	計画書を市民の皆さまに周知するにあたり、計画書の「言葉の意味が分からない。」ということとは避けないとはいけません。委員のご意見を踏まえて事務局で再検討し次回お渡しする計画素案に反映させます。
委員	P67の手入れで変わる森林の様子が書かれているが、ここに出ている具体的な植物名が三田の自然にある植物とは少し違うのではないかと。部会長はどう思われるか。
部会長	私も事前説明で気付いて、クヌギは違うので、アベマキに変えるようにと伝えていた。三田市にクヌギは自生していない。あっても植えられたものである。三田を代表する植物ではないので、あえて戦略に名前を挙げる必要はない。
事務局	その辺りのチェックを進めます。
委員	P68に里山とは、という説明はあるが、里山と里山林とは違う。P70に里山林のことは書かれているが、一番下の緑の部分の黄色の山が何なのか。最終的に何が残るのが知りたい。P67、68にも書かれてはいるが、里山林というのがあまり説明できていないのではないかと。
事務局	P64の③に里山林について記載しています。
部会長	用語解説の中にも里山は出てきているが、里山林はない。
委員	里山林の将来の姿がわからない。どういう植生を残すのか、という話がこの部会でもできていない。P64はアカマツ林の話だが、これはおじいさんが柴刈りに行っていた時代の話である。P67にあるような植物の話なので、アカマツだけではない。私は里山林に関わっているから分かるが、何も知らない人には何の木を植えたらいいのか分からないだろう。そこをはっきりさせることは、とても大事だと思っている。
委員	最初の森市長の挨拶の3行目にある「タガメ、トンボ、ホタル」と書いてあるが、タガメはメダカではないか。タガメだけ具体的なので、メダカ、トンボ、ホタルのほうがすんなりくる。聞き間違いではないか。
事務局	この挨拶文は、イメージとして入れているもので、今後精査します。

委員	<p>この冊子を手取る人のことを考えると、最初に頁をめくって行って、これは関係ないと思われないようにしたい。そこで重要なのはタイトルだが、先ほど話題になった「半自然」というサブタイトルについては再度検討されることと思う。</p> <p>戦略において、国や国際機関が大事だと言っていることは、それはそれで結構だが、それらをそのまま書くのではなく、市民に響く何かがないと、ますますアンケート回収率は低くなり、市民を遠ざけてしまうことになる。</p> <p>生き物や自然を維持していくことだけが目的ではなく、平たく言うと次の世代の人が、如何に三田で楽しく暮らせるか、ということではないか。総合計画等には街をこうしていきたいというのが書かれている。市民を放っておいて生き物だけがいたらいいのか、と見られないようにすることが大切だ。</p> <p>「はじめに」の次に、「生物多様性とは」が書かれているが、専門的で市民は自分たちには関係ない、となるのではないか。子どもの頃に、カブトムシやメダカを捕ったような環境が減っているのですよ、ということが最初に伝わるようにならないか。そうであれば、減らさないためには何をすればいいのかということで、現況はこうであり、多様性の危機はこうで、いろいろな問題があって、このような活動が必要になるのだという書き方であれば、見てみようという気にならないだろうか。</p>
部会長	<p>どの自治体も工夫している。神戸市はイラストで生物多様性を描いたものを載せていたりする。</p>
委員	<p>基本はそこに住んでいる住民のため、もっと言えば次世代のためだと思うので、それがしっかり伝わらないと、どこかの専門家がやっているのだろう、ということになる。イラストを載せたらいいということではない。他の自治体も多様性戦略を作っているが、担当者自身が、多様性戦略が何か良く分かってないと言っていたりするので、ましてや市民は更に分からないだろう。</p> <p>生物多様性という言葉の言い換えは難しい。漢字5文字見ただけで関係ないとなりそう。最初の部分で、市民のみなさんのために、ということが上手く伝わるようにしなくてはならない。</p> <p>若者のアンケート調査の回収数が少ないが、若者が生き物に関心がないかといえば、全くそんなことはない。小学生、中学生、高校生等いろいろな世代と付き合い合っているが、関心は十分にある。ただ、このような戦略に眼を通すかといえば、難しい。違う層が中心にならざるを得ないだろう。</p>
委員	<p>委員の意見に同意するが、一方で、あまりこうあるべきだというのを前面に押し出すと、民意を反映せずに行政が一方的に目標をつくっているように思われてしまう。そういう意味では、前回の案では、ある程度下地をつくって、みんなが繋がってきてから、みんなで価値を共創していくという段階を踏むということであった。それが早い段階で分かるようにしておくことだ。専門家がつくった目標が前面に出てきて、市民の方々は、じゃあ何をすればいいのか、それを守ったらどんないいことがあるのかが分かりづらい構成になっている。</p>
部会長	<p>P54にホップ、ステップ、ジャンプが書かれているが、あっさりしすぎに思える。良いことが書かれているので、ここをもう少し強調するなど、具体的に見える化するような工夫が必要かもしれない。</p> <p>難しいことではあるが、委員がおっしゃるように、肝心な部分でもあるので、頑張ってください。</p> <p>この点でみなさんから、こうした方がよい等の具体的な案があれば、ご意見をお願いします。</p>

委員	P55 のイラストは 2030 年の三田市の理想の姿であるが、市長の挨拶の次の頁にこのイラストを置いて、この姿にするための、この冊子なのだと言えば、いきなり文字で始まるよりいいのではないか。
委員	第 3 章は短いが、これが戦略の全体像を現わしているのに、長い資料の中に埋もれてしまっているのではないか。 第 1 章は副読本的なことが書いてあるので、第 3 章の目標を最初に持って来られないか。第 1 章の内容はどの戦略にも書かれている事柄で、詳しく知りたい人が読むだろう。
部会長	第 3 章を先に持ってくるというのもありだろう。第 1 章の内容は資料編でもいいかもしれない。事務局の方も悩まれて、とりあえず、今はオーソドックスな形にされている。
事務局	まずは手に取って見ていただきたいので、編集の中で工夫します。第 1 章は資料編にまとめて整理したほうが良いのではないかと考えています。
部会長	事務局でそういう方向性でいけるかどうか検討をお願いします。
事務局	その方向で検討します。
委員	P79 に武庫川さとやま（仮称）フォーラムというのがあるが、多様な主体が集まって繋がっていくのは良いことである。一方で、こういうフォーラムはつくるのは簡単だが、長期的に運営していくのは大変である。事例として挙げているマザーレイクフォーラムは県がやっているもので、それなりのマンパワーがあり、運営できる。市のレベルで、人材も限られているなか、三田市がこのフォーラムの実施主体となり責任を持ってやっていく覚悟はあるのか心配だ。つくったもののその後が続かない無責任なことをすれば、みんなからそっぽ向かれるので気を付けなければならない。先日、市に情報は渡したが、大阪湾のもっと大きいフォーラムがあるので、そこと上手く緩やかに繋がりがりながらやっていく方法もある。市では、まず小さな地域フォーラムをつくるというくらいのスタンスのほうがもう少し気軽に始められるのではないか。
部会長	これまでは、とりあえずアイデアがあれば盛り込んでおけばいい、という形で、今はこんな案になっているが、これからは精査していただいて、実現可能性を考慮していただくようにしてもらいたい。
委員	この冊子は生物多様性と言いながら、生物の写真が非常に少ない。資料編の中に写真を載せるつもりなのか。
事務局	まだ、具体的なことは決まっていますが、今日いただいたご意見を参考にして、検討していきます。
部会長	普及啓発用の概要版に多く写真を掲載するなども考えられる。
委員	三田市のキャラクターにキッピーというのがあるが、あれはまだ使っているのか。あれはキジだと思うのだが、市の鳥とした理由は、里山の生き物として選んだのか。
事務局	昭和 59、60 年頃に三田の野鳥で代表的なもの、ということで選んだのではないかと思います。
部会長	当時はまだ里山が多く残っていたので、キジも多かったのではないか。
委員	里山の生き物ということで、上手くマッチするかもしれない。
部会長	ほかの自治体の戦略にはシンボル種のようなものを決めてやっているところもある。市民もなぜキッピーがキジなのか知らない方もいらっしゃると思うので、これを機会にその辺りの説明をしてもいいかもしれない。

事務局	市の花はサツキで、木はアカマツです。
部会長	サツキは違うが、アカマツは里山の代表的な木である。
委員	マツタケ山の話は恵みの話に繋がるのではないか。
部会長	そういう話であれば興味がわくかもしれない。
委員	市長の挨拶の 6 行目に「隕石落下以来の大量絶滅」とあるが、「以来」という言葉を使うと、その行為が続いていることなので、ずっと減り続けていないとこの言い方は使えない。違和感があるので表現を再考してほしい。
事務局	この挨拶文は、イメージとして入れているもので、今後精査します。
部会長	時間も押してきたので、協議事項のその他として、事務局から提案があるとのことで、説明をお願いする。
事務局	[追加資料]「4月14日開催の生物多様性戦略部会での事務局提案事項について」、[資料5]「皿池湿原保全活動計画」、[資料6]「まちなか里山公園整備方針」に基づき説明
事務局	資料 5、6 については、これまでの取り組みの成果、実績の評価を行い、課題について提供しますので、それに対してご意見・お考えをお示しいただき、その結果を戦略の中に反映していきたいと考えています。 今ご説明したとおり、三田市では、アウトドアによる新たなまちづくりの推進を全庁あげて取り組もうとしています。関心のない人をどのように取り込んでいくのか、という導入部分でこれがきっかけにならないかと考えています。 アンケート調査の結果から、問 12 の生き物や自然環境を対象とした保全活動や観察会に今後参加しないという回答が半数以上ですが、問 15 には、自然に親しみながら自由に遊べる野外環境や健康増進に繋がるプログラムに一定のニーズがあることが読み取れます。戦略に上手く結びつけることができれば PR できるのではないかと考えます。
事務局	シカの被害に対して、バッファゾーンモデル地区を設定して取り組み、全市に広げていくことができると考えています。市がどのような支援を行えば面的に広げていけるのか、防災対策としての里山林の保全というものの重要性というところも PR できないかと考えています。それらについてご意見をください。
委員	結論としては反対することはないのだが、プロセスの問題で、新聞記事の話は恵みの還元には当たらない。全く別の話である。千丈寺湖はすでに利用されているが、自然から何か恩恵を受けたのであれば分かるが、あたかも生物多様性の恵みを受けたかのようにいうのは違う。
部会長	今の市のご提案は、すでにこの案の中に散りばめられている。今はいろんなことが入っていて、それぞれの特色が見えにくくなっている。もう少し強調したいという話ではないか。
事務局	この戦略に他の市とは違う三田らしい特色を出したいということです。
委員	里山林を残しましょう、バッファゾーンを設置します、という話をロジックとして結論とされている。保全団体さんの紹介も載せているが、その団体活動に対して三田市はどのような応援するのか、たくさんの無関心の方をそこへどのように誘うのかについて、何をするのが欠落しており、一切書かれていない。それなのにアウトドアの話になるのは、ロジックとして違うのではないか。
部会長	全体としてのストーリーの整合性については、きちっと考えていただく必要がある。防災・減災の取組について、事務局はどんなイメージを持っているのか。

事務局	他市の事例では、里山放置林の植生管理があったので、そのようなことを考えています。
委員	<p>防災・減災に関しては、武庫川流域治水の三田市配当分があるので、その20%をどう環境と連動させて数値目標として達成できるかが三田市のミッションである。これから流域治水の対策協議会をつくって計画を作っていく。それを踏まえて流域の水の貯留ということを環境とセットで考えることである。</p> <p>三田市は粘土層のため、基本的に地下浸透の工事はできないはずなので、それについては、私を含め専門家の意見を聴いて欲しい。</p> <p>田んぼダムの推進については、県も推奨しているので、それは入れておく。田んぼに水を溜めると生物多様性にプラスのことが多い。ため池を環境に配慮しながら補強し、治水もすれば減災になる。現状では、各方面での減災を進める計画を検討していく、という表現になるだろう。</p> <p>アウトドアの話では、水道水源の千丈寺湖でリゾートを作るというのはどうなのか。関西万博のテーマが再生や脱炭素というSDGsに関連することなので、その方向性でいかななくてはならない。千丈寺湖は浅くて広く、水の滞留時間も長いので、そこに人が多く集まるのであれば、完璧な下水処理システムを作る等、現状より良くなるのが数値で言えるようにしておかなければ施策と言えない。</p>
事務局	千丈寺湖とは限らず、市内の全ての地域でアウトドアに繋がるようなことを考えています。
委員	野外活動センターについても、ここには水道水源があるので、神戸市も含めて流域協議会を設置してルールを決めて、それなりに答えを持っておく必要がある。世界の常識から見ても、水源地の周辺を開発するというのは問題であることは認識しておく必要がある。
事務局	今のご意見について、具体的にはどれがグリーンインフラに相当しますか。
委員	<p>田んぼダムがグリーンインフラである。一方で山田ダムは土木技術なのでグレーインフラである。田んぼダムは県の政策になっているし、多面的機能のメニューにもなっているので、促進していくということで入れておくのがいいのではないか。</p> <p>グリーンインフラは自然を活かした治水なので、地下に染み込ませるということになるが、先ほど言ったとおり、粘土層のニュータウンでは意味がなく、減災ではなく、むしろ災害を誘発するので注意が必要だ。それも含めて、正しいことを書かなければならない。大きい流れでは、既存の課題を解決しながらネイチャーポジティブを実現するというのをどこかで書かなければならない。</p>
部会長	防災・減災は重要だが、そのイメージからすると治水や地滑り、土石流という話になって、生物多様性とは離れていくように思う。
委員	シカによる食害をしっかり防ぐことは防災・減災に繋がっている。
部会長	シカの食害対策は防災・減災に繋がるが、それをあまり強調しすぎてもP54のホップ・ステップ・ジャンプとは離れてしまうので、バランスが重要である。
委員	ため池は防災・減災に入れるものなのか。
委員	兵庫県の総合治水課が費用を掛けているのはそこである。
委員	ため池を整備することで減災になるけれど、そもそも防災・減災に活かすというのとは少し意味が違うのではないか。

委員	<p>今、ため池は老朽化している。そのリスクになっているのを補てんして環境配慮しながら、嵩増しし、貯水容量を大きくして減災するというをやっている。洪水になる前に、予備放流でため池の水を減らして、その容量の水を溜めることができるようにゲートを付ける補助も施策としている。生物多様性への効果は分からない。</p>
部会長	<p>ここまでの委員のみなさんのご意見を踏まえて、事務局にはたたき台を作ってください、また委員からご意見をいただく。</p>
委員	<p>市街化調整区域の活用については、OECM、自然共生エリアのインセンティブとして、現状は非公式だが、候補として考えられている。市街化調整区域の建築許可のルールは市町村が設定できる。その自治体のルールのもとに OECM になっていたなら、市街化調整区域の荒地や耕作放棄地に、例えば、幼稚園や地元野菜を売るカフェ等の環境配慮施設の建築許可を緩和する等が考えられる。</p> <p>市街化調整区域をどうするかは、自然共生エリアの政策の中で非常に重要な論点になっている。神戸市等でも検討を始めているが、市街化調整区域を規制緩和しながら、自然共生エリアとして実質荒地等を上手く使うことができれば、環境にプラスになるという考え方で進めていくのは一つの方法である。</p>
部会長	<p>予定時刻も過ぎているので、どうしても言っておきたいご意見がないようなら、議論はこれで終了とする。</p> <p>事務局は本日出たご意見を踏まえて、案を再度修正していただき、次回の検討部会までに委員へ示すようにお願いします。</p>
事務局	<p>本日いただいたご意見を、事務局で検討し、反映、整理したものをご提案します。次回は6月の下旬頃を予定していますが、お気付きの点をご指摘いただければ、そのご意見も随時反映させます。</p> <p>次回の部会開催日については、みなさまのスケジュールを伺って調整します。当初は次回第4回の部会で終了ということになっていましたが、第5回が必要になる場合もあり、その節はよろしく申し上げます。</p> <p>これにて、生物多様性さんだ里山戦略の第3回策定検討部会を終了します。</p> <p>以上</p>